

パンデミックを生きる指針

—復興へ向けた希望のありか

内田聖子 (PARC)



#STAY HOME
IS A PRIVILEGE !!

ステイ・ホームという“特権”

“エッセンシャル・
ワーカー”とは誰か



<https://civileats.com/2020/04/17/poor-conditions-at-meatpacking-plants-have-long-put-workers-at-risk-the-pandemic-makes-it-much-worse/>

“わたしたちは、これらすべてが終わったのち、それは夢に過ぎなかったのだと考えるよう促されることでしょう。

実に奇妙な出来事だったが、それは現実とは何の関係もない、今や目を覚まして、**通常に回帰すべき時だ、**というわけです。

しかしほんとうはそうではない。**通常こそが夢だったのです。**

起こっているこのことこそが現実だった。これこそが現実です。

**わたしたちは、わたしたちをほんとうにケアしているのは
どんな人びとなのかに気づいた。**

**ヒトとしてのわたしたちは壊れやすい生物学的存在にすぎず、
互いをケアしなければ死んでしまうということに
気づいたのです。”**



デヴィッド・グレーバー

『資本主義後の世界のために』、『負債論 貨幣と暴力の5000年』

“わたしたちは経済を、まるでわたしたちには帰属しないものであるかのように扱っています。経済を救うためには人間が死んでもOK、などと言うひとさえいる。命と経済を分けて扱うことなどできないということが、どうしてわからないのでしょうか？ ほんとうに自由な社会では、こうした考えの誤りが正されなければなりません。”

“**実に多くの根本的な問いが、長い間提起されずにきました。なぜならそのような問いは、新自由主義的経済学者の言語では言葉にできないものだったからです。**そうした経済学者は、自分たちの学問はあらかじめすべての答えを用意しているかのように振る舞ってきた。

新自由主義とは本質的に言って、人びとが今とは別の、もうひとつの未来を思い描くことのないように計らう妨害の手段にほかなりません。どんなオルタナティブもありはしないのだから、というわけです。

けれどもたぶん、未来はほんとうは、わたしたち次第なのです！ わたしたちは今、この危機のなかでまさにそのことに気づいている。”

“ハイパー・グローバル化の擁護者たちは、重要な製品の生産を自国内に戻したり、新たな地域的なサプライチェーンを構築しようという要求に対して、**そのような提案は「自給自足」という無駄な努力であると、間違った性格付けをしながら反対する。**”

ハイパー・グローバル化体制下では、政府は公共の利益を保護する手段を持たないという現実を目覚めさせられたのだ。この気づきの“精霊“は、簡単に元の瓶の中には押し戻されない。



ロリ・ワラック (Public Citizen)

“この危機の教訓をポジティブな変化に活かすのであれば、その結果はより強力で回復力のあるローカル、国家そして地域の経済となるだろう。それは、大勢の多様なプレーヤーと協力して、入手可能な価格かつ広範なアクセスを可能とする必須の製品・サービスを生み出すように設計されるだろう。

具体的には、人間らしい尊厳ある仕事の創出、小規模農家の支援、環境の保護である。これらの変化が気候変動に対処するためにも必要であることは偶然ではない。”

“共通の課題は、各国が人間のニーズに応えるために経済の民主的統制を回復するための政策空間を必要としていることである。”

ハイパー・グローバル化の終焉か、それとも単なる「平時」への復帰か

- 誰がルールをつくっているのか？
- 保護主義／自国優先主義を「選べる」国はどこか？
—グローバル・サウスからの提起
- 主権としての政策スペース